

ポストコロニアル理論で救えるか

——田村俊子の「移民」小説

宜野座 葉央見 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

はじめに

筆者は、科研プロジェクト「日中戦時下の中国語雑誌『女声』研究——フェミニスト作家田村俊子編集長の視点から」に研究分担者として参加している。田村俊子は大正時代に女性の生々しい感覚を伝える短編小説を次々と発表して知名度を得た作家である。だが1918年から日本を離れてカナダのバンクーバーに移り住んだ。さらに2年のロサンゼルス滞在を経て1936年に帰国したが、もはや作家として評価を取り戻せなかった。既婚男性との恋愛にも息詰まり居場所を求めて中国に向かい、雑誌『女声』に力を注ぐなか1945年上海で客死した。『女声』は日本占領下の上海で中国人女性向けに彼女たちの母語で発行された雑誌で、田村が意義を見出した背景には、バンクーバーでのエスニック・ジャーナリズム（日系移民向け日本語新聞発行）の経験があるのだろうが、必ずしも詳らかではない。

こうした文脈において、田村の北米経験と上海での活動を繋ぐ一環をなんとか見出せないかという期待から筆者は本稿を執筆した。従来、評価されることがほとんどない田村の昭和期の「移民」をテーマにした小説群、すなわち日系二世を主人公にした小説群を「外からの眼差し」の導入によって新しい価値を付加できるかどうかを検討してみたい。

筆者の専攻は文学研究ではなく歴史研究であり、田村俊子の移民小説を文学的に再評価することには関心はない。田村の移民小説が顧みられなかったのは、率直に言って魅力に乏しいという理由からだと思う。「小説以前」（工藤美代子）という酷評や、田村の業績として言及しない（長谷川啓）など否定的扱いが目につく。筆者にはそうした評価を覆えそうという願望は

ない。筆者の場合、ジュリー・オオツカの小説『屋根裏の仏さま』によって文学が歴史を伝える圧倒的な力に感銘を受けており、対極の読書経験となった田村の移民小説を文学の次元で論じることは不可能である。

筆者は、2019年11月の学会パネル発表で同席した比較文学研究者の山出裕子から「移動文学」という概念があることを教えられた。率直なところ、そうした新しいカテゴリーで分類されることで、かろうじて置き場所を得るというのが、田村俊子が「佐藤俊子」名義で著した移民小説群に関する妥当な評価ではないかと感じている。

従って、筆者は、「外からの眼差し」として、日本語のネイティブではないアメリカの日本文学研究者が英語で書いた論文を取り上げ、この論文が提起する議論を紹介しながら、田村の移民小説において認識されにくいポイントを検討する。すなわち、日本語で書かれたがゆえに、私自身を含めて日本語で読む読者に強く認識されないポイントを考察するのである。

1. なぜポストコロニアル理論家の名前が挙げられたのか

「外からの眼差し」として筆者が参照したのは、アン・ソコルスキー Anne Sokolsky が2003年にカリフォルニア大学バークレー校に提出した博士論文“Not Just A New Woman Writer: The Political Awakenings in Tamura Toshiko's Fiction From 1936 To 1938”である。ソコルスキーは、この博士論文を基にして2015年に単著 *From New Woman Writer To Socialist: The Life and Selected Writings of Tamura Toshiko from 1936-1938* を刊行したようだが、筆者はこれ入手していない。従って、博士論文後、著

者に生じた認識の深化を考慮していない。筆者の目的は、ソコルスキーの博士論文に遅ればせながらのアカデミックな評価を与えるのではなく、彼女の論文をあくまで「外からの眼差し」の一つのケースとして扱い、その議論を批判的に検討することだからである。

ソコルスキーは、彼女の論文で彼女が援用する理論家として、『オリエンタリズム』の著者エドワード・サイード、ポストコロニアル理論の代表的論客ホミ・バーバ、そして、ポストコロニアルの問題意識に加えてフェミニズムの立場を示したトリン・ミンハの名を挙げている。しかし残念なことに、1936年から38年の田村俊子に焦点化したソコルスキー論文において、バーバやミンハがはたして必然的な存在なのか明確に伝わってこない。それでは、どうしてソコルスキーはポストコロニアルの理論家の名前を挙げたのだろうか。ソコルスキー論文が書かれた時期には、ちょうどポストコロニアル理論がアメリカのアカデミズムを席卷していた。さらに、名門カリフォルニア大学バークレー校で博士号を請求する論文なら何らかの洗練した理論の応用が期待されるので、この期待をかわすための苦肉の策だったというのが、筆者の推測するところである。

サイードの『オリエンタリズム』の登場が1978年である。ポストコロニアルの問題意識は1980年代以降、アメリカのアカデミズムに拡がって、やがてバーバやミンハのような非西洋出身の著者が出現した。但し、アジアは当初、研究対象として意識されなかった。その点は、台湾出身で少年時代を日本で過ごし、アメリカで大学人となったレオ・チンが、彼の優れた著作『ビカミング・ジャパニーズ』の執筆動機として述べている。西洋中心主義思考を乗り越えていくはずのアカデミズムにおいて、皮肉にもアジアは意識の外に置かれた。だからこそ、レオ・チンは、帝国日本が崩れ去った後にも台湾の人々が感じる痛みや希望を含めた「文化」に目を向けた著作によって、アメリカのアカデミズムの状況に「介入」したのだ、と。当然のことながら、彼の著作にとってポストコロニアルの問題意識は核をなすものである。

しかし、ソコルスキー論文において、ポストコロニアル自体は全く問題にされないし、ポ

ストコロニアル理論が田村俊子の読解にとって必然であるということも論証されない。ソコルスキーは、バーバやミンハといったポストコロニアル理論家が登場するはるか以前に、田村（佐藤）俊子の移民小説が「西洋・東洋」の二項一対の枠組みを揺るがし、文明・人種・民族国家といった概念を覆す作業を行ったと主張している。文化の差異が表出する「中間地点」としてバーバが「第三の場所」と呼ぶ地点に、田村俊子が立っただけでなく書いた、とソコルスキーは強調する。しかし後述するように、ソコルスキーが呼ぶ、田村俊子の「流動的周縁性」に関する議論は必ずしも充分ではなく、説得力を持つとは言えない。

それでは、ソコルスキーによるポストコロニアル理論家の応用が全面的に的外れで無意味なものであるかと言えば、そうとも言い切れない。精緻な議論としては提供されていないが、田村俊子が察知した人種・ジェンダー・社会階級の問題を彼女の小説・随筆から抜き出すように示して理論家の議論と照合しようとするスタンスを否定する必要はないだろう。

2. 政治的深読み：「山道」の扱い

ソコルスキー論文の章立てでは、前半第2章までは田村俊子が北米に移り住む前の時期を扱い、田村俊子という日本の女性作家を欧米の「新しい女」と関連付けて紹介する。重要なのが後半第3章から第5章で、18年間の北米滞在を経た後に佐藤俊子名義で書かれた小説群を扱う。中国に向かう直前の1938年に発表された「山道」は、執筆年代順の配置であれば第5章にくるはずだが、意識的に第3章で扱われる。この順不同はさておき、ソコルスキー論文には日本の歴史に関して根本的に的外れな議論が存在する。筆者としては歴史研究の立場から指摘しないわけにはいかない。明白な錯誤は、「山道」における田村俊子のノスタルジアの感覚と、日本社会の変容を同じレベルで論じた点にある。

田村俊子が評価を得た大正期と異なり、「山道」が発表された時点では日本は日中戦争期に入っており、検閲に限らず言論の自由そのものが狭められていた。過去を懐旧する女性キャラクターの感覚はソコルスキーが論じるように

ノスタルジアであるかもしれない。だが、この感覚を日本社会の変容に安易に重ねて議論することは全く適切ではない。筆者は強い違和感を持った。ノスタルジアなど論じていない歴史家ジョン・ダワーの仕事に依拠しながら、ソコルスキーは彼を誤用してノスタルジアを解釈のキーワードにしたのである。ソコルスキーが言わんとするところは、日本が過去の状態に回帰しようとする志向があったということらしい。詩人・萩原朔太郎が『日本への回帰』を出版したのが1938年であり、日本文学研究者となるための教育課程で仕入れた知識で、日本の政治・経済・文化をひっくりかえしたノスタルジア現象が起きていたように勝手に思い込んだのだろうか。

ソコルスキーがノスタルジアとして取り違えたのは日本の復古主義であろう。彼女が誤認した1930年代日本の復古主義、あるいは日本の伝統を強調した反動的な風潮は、実際には同時代の政治的意図に合流するものである。ノスタルジアとは直接の関係はない。具体的史実として、「天皇の軍隊」が政治的なプレゼンスを強化した。陸軍の皇道派・荒木貞夫は1920年代まで「国軍」と呼ばれていた陸軍を1930年代のキャンペーンで「皇軍」と呼び変えさせるのに成功し、陸軍大臣となってからは靖国神社の境内に日本刀の鍛冶場を設け「靖国刀」の制作を始めた。海軍では、日露戦争での勝利に貢献した提督・東郷平八郎が1934年に死去した後、神社化の動きが始まり、1940年、「東郷神社」が建立された。こうした、およそ近代的ではなく、一見、過去の状態を取り戻すことを志向するかに見える動きは、実際には軍部の権威強化に資した。国家神道で最高位にある祭司であり、陸海軍に統帥権を有する大元帥である天皇との結びつきを、神社や刀がその象徴性を通じて示威することになるからである。同時代を観測した戸坂潤が『日本イデオロギー論』で論じたように、日本主義という観念が、物質的基盤を持つ軍隊組織の権力を増大させたのである。

ソコルスキーは「山道」のテキストに、軍国主義批判、軍部の影響力が強くなった同時代の日本社会への批判が暗示されていると言う。だが小説の作者が置かれた社会状況、すなわちテキスト外の情報を過度に意識した政治的読解はかなり強引である。ソコルスキーは、提

喩 (synecdoche) として「山道」に登場する男を「父親的に統制する日本」、女を「その日本で無力なまま、同意なしに導かれる存在の人々」とみなす。彼の凝視は、日本政府が市民を統制する試みであり、女が彼の凝視に加わることは、日本人が気がつかないうちに、いとまたやすく軍国主義の政府に巻き込まれたことを強調する、という。正直なところ筆者は賛同できない。外部情報なしには成り立たない解釈はやはり「政治的深読み」ではないだろうか。

筆者はあるケースを想起した。戦時中1942年に親独ヴィシー政権下のフランスで製作された映画の評価に関して、映画研究者スーザン・ヘイワードが指摘した問題である。ヘイワードは、歴史家たちが3本のフランス映画を「レジスタンス映画」として言及してきた従来の扱いに、ごくやんわりと異議申し立てを行っている。3本とは、マルセル・カルネ監督の2本*Les Visiteurs du soir* (邦題『悪魔が夜来る』)と*Les Enfants du paradis* (『天井桟敷の人々』)と、ジャン・ドラノア監督の*Pontcarral, Colonel d'Empire* (日本未公開)である。ここでは、3本のうちで筆者自身が何度も視聴して内容を理解しているマルセル・カルネ監督の『悪魔が夜来る』*Les Visiteurs du soir*に関する議論を参照しよう。

筆者自身の少女時代の記憶にもあるが、日本でのテレビ放映に際して『悪魔が夜来る』はフランスのレジスタンス精神を伝える映画として紹介された。これはフランスでの評価をそのまま伝えたもので、フランスの歴史家たちは、この映画を長らくそのように扱ってきた。だがヘイワードは、そのような解釈をあくまで一種の「読み替え」(a double reading)と考えている。筆者自身はヘイワードに同意する。

『悪魔が夜来る』は、中世を舞台にした御伽話として、恋人たちの不滅の愛が悪魔の邪悪に屈しないことを確認して終わる。この映画にはドイツへの抵抗を示す要素は明示的には存在しない。ただ一カ所、エンディングがきわめて象徴的である。悪魔の魔法によって愛し合う恋人たちは2体の石像に変身させられてしまう。だが石に変えられた恋人たちの心臓から鼓動が聴こえてくる。(筆者が付言すれば、観客はありえない鼓動を確かに聴き、自分で解釈する余地を持

つ)。歴史家たちの主張を映画学的に翻訳したハイワードによれば、このエンディング・ショットは、シニフィアン（聴覚・視覚情報）とシニフィエ（概念）の間に分裂を生じさせるので、記号上のシフトをもたらす得る。それにより、「心臓の鼓動は抑圧者に屈せず戦い続けるというフランスの意思を意味する」という解釈が可能になる。かくして御伽話映画『悪魔が夜来る』は「レジスタンス映画」としての扱いが当然視されたのである。

もちろん、「レジスタンス映画」という評価が生まれたのは、『悪魔が夜来る』がヴィシー政権下で製作されたという事実、テキスト外部にある情報を歴史家たちが知っていてこそである。フランスの歴史家たちの従来の解釈は、彼らの「読み替え」、(筆者が換言するなら「単なる思い込み」)かもしれないと、ハイワードは的確にも指摘したのである。

翻って、ソコルスキーが「山道」に日本の軍国主義への批判を見出すという主張も彼女が望む「読み替え」だろう。

3. 「how」でなく「what」への焦点化

管見では、日本近代史研究者はともすれば、「何」を見出すかにこだわる傾向があり、そのため「いかに」に見出されるかには必ずしも鋭敏ではない。換言すれば、what に集中してhow に注意を払わないのである。文学研究の門外漢である筆者の乱暴な言い方を許してもらえれば、対照的に文学研究者は、小説の構成、記述する文体など通じて、いかに伝えるのか、表現のスタイルとしてhowにこそ注意を払う。Howの観点では芳しくない田村俊子の移民小説が日本の文学研究者に高く評価されないのは、そのせいであろう。発表当時、作家としての評価を取り戻せなかったのも不思議ではない。

先に題名を挙げたジュリー・オオツカの『屋根裏の仏さま』は、写真結婚で日本から北米に渡った女性たちの声を、「わたしたち」の人称で伝えるスタイルによって読む者に衝撃を与える。その簡潔で徹底的に磨かれた文体は、戦後生まれのオオツカが、数多くのインタビューとリサーチを経て戦略的に選び取ったhowである。数々の賞を授けられた現代最高水準の小説と比

較されては、田村（佐藤）俊子にとって気の毒ではあるが、彼女の移民小説が顧みられない理由を考える上で、これほど端的な参考例はないだろう。

ソコルスキー論文の特徴は、田村（佐藤）俊子の小説に関してhowではなく、もっぱらwhatに目配せした点であろう。小説の構成や文体ではなく、何が書かれたかに焦点化することで浮かび上がる問題意識をリスト・アップした。日本からの移民である登場人物たちが遭遇する社会的不平等は人種・社会階級・ジェンダーに起因する。ごく手短かに述べよう。

「小さき歩み」のヒロインは、カナダで生きる日本移民の娘ジュンであり、二世として親世代（移民一世）との価値観との対立、カナダ社会での人種差別、階級格差に悩む。ソコルスキーは、田村が彼女の従来のヒロインたちと違って、この小説の最後でジュンに演説を行わせることで公的な声を獲得させた点を強調する。また一方で、田村が、ジュンに好意を寄せ励ますイギリス人男性で社会主義者キーラムに、無意識の人種的・性的先入観があることを暴く点にも注目する。

「カリホルニア物語」はアメリカに暮らす二世の女性たちの対照的な人生を描く。ルイは画家として社会的成功を得るが、親友ナナは親に強いられた日系人男性との結婚で苦しみ、妊娠後は姑から子供の父親を疑われて自殺する。ナナの自殺はアメリカ社会では不可解なものでしかない。ソコルスキーは、田村が二世のナナを追い詰める日本的価値観だけでなく、白人たちがルイの作品をあくまで日本美術との関連で評価する経緯にも人種に基づく権力構造（筆者が換言するなら、ネイティブ・アートの価値を決めるのは西洋）を露出させることを指摘する。

「侮蔑」は、1932年のロサンジェルス・オリンピックでの日本選手の活躍に感銘を受けた二世男性ジミィが、憧れてやってきた日本で直面する疎外を描く小説である。ソコルスキーは、田村（佐藤）の移民小説に積極的な評価を与えようとする鈴木正和の先行研究を挙げつつ、アメリカの習俗で育ったジミィを決して日本人として認めることのない日本社会を照らし出す田村の視座を強調する。

筆者はごく大雑把に紹介したが、田村（佐

藤)が異文化と出会う境界上で得た洞察を小説に活用した成果として、ソコルスキーはこれらの小説に意義を見出すのである。

日本語のネイティブ読者であれば、まず田村(佐藤)俊子の小説に対してwhat以上にhowに関心が向くだろうが、ソコルスキーは立場が異なる。アメリカで研究者たらんとしたソコルスキーの論文は、田村俊子の仕事のなかでも、日本はおろか海外の日本文学研究で知られていない、あるいは研究が未開拓状態にある1936年から38年の小説を、英語圏において紹介することを主眼としている。それゆえ、何が書かれているのか、を伝えることにかなりのエネルギーを費やすことになったのだ。

ソコルスキーの田村俊子のポジショナリティへの着眼は重要だろう。だからこそ、もっと議論があっても良かった。加えて筆者は、ソコルスキーのバーバの応用には不満を感じる。バーバの『文化の場所』は筆者にとって難解だが、ソコルスキーを敷衍する作業として少し触れてみよう。バーバは文化的差異が表出する境界的空間では二項対立(私的なものと公的なもの、過去と現在、内面的なもの和社会的なもの等)にからめとられない「裂け目」が生まれると考え、そこに可能性を見出している。「裂け目」は中間的であり異種混雑性と開放性を有するというのが、そのような「裂け目」でこそ考えることができるというのである。ソコルスキーが田村の小説に使う「第三の場所」・「裂け目のスペース(interstitial space)」はここに由来する。

けれども、このように複雑なバーバを安易に引用することは読者に対して親切とは言えない。ソコルスキーがバーバの『文化の場所』から長く引用した箇所(日本語翻訳)には、以下のようなものがある。

文化的差異を表明することによって、文化表象とその宣布のレベルにおいて、過去と現在、伝統と現代性といった二項対立を問題にすることができるようになる。その問題とは、現在に意味を与える際、伝統の名において、あるいは過去の装いをもって繰り返され、置き換えられ、翻訳されるものがあること、そしてそうした過去とは、必ずしも歴史的記憶の忠実な再現ではなく、古めかしさを巧みに装いながら権威

を表象する戦略だ、ということである。この繰り返しは、闘争の起源に対する我々の認識を否定する。それは、文化的なシンボルやアイコンが均質化の効果を持つという我々の意識を掘り崩し、一般に文化的統合の権威についての我々の感覚に疑問を突きつけるのである。

(「第一章 理論へのこだわり」本橋哲也翻訳)

このパッセージを読んで筆者が想起したのは前述した復古現象である。筆者にはバーバから復古現象の戦略性を強調されたように感じる。だが、ソコルスキーがこのパッセージを引用したのは、田村の1936年の移民小説「薄光の影に寄る」に現れる日本人移民女性の現実逃避的な態度に関する議論においてである。この女性は、日本人移民男性の妻であり母として暮らすカナダでの生活を受け容れることができず、気ままな娘時代を過ごした日本の記憶を美化しながら生きている。このような女性キャラクターを論じる場合、大仰にバーバを用いても効果的とは筆者には思えない。アメリカでの文学研究において通常に用いられる精神分析の概念を導入して、この女性の病理を指摘する方が効果的だったのではないだろうか。

このように、ソコルスキーによる理論家の引用は必ずしも効果的ではない場合があり、彼女によるwhatの提示に役立っているとは言えない気がする。

4. 結びに代えて

ソコルスキーの第5章は理論の呪縛から解放されたのか、強引な理論の挿入はない。彼女が田村俊子による「社会主義」の小説として分類する「昔がたり」・「残されたもの」・「幸福の一滴」に加え、日中戦争進行下での随筆「馬が居ない」などが論じられる。この第5章で紹介される小説群は、通常は日本でも注目されない作品と思われるので、英語圏で紹介された点は意義があるだろう。1933年に共産党が弾圧されたのを契機に日本のプロレタリア文学は言論界から退場させられた。1936年に日本に舞い戻った田村俊子が貧困家庭や左翼思想を扱った小説は、日本の読者には新鮮さではなく既視感を与えただけだろう。当時の日本で評価されるにはあまりに

タイミングを逸しており、作家としての再起に有効ではなかった。そうした田村（佐藤）の社会主義小説ではあるが、一人の作家の活動の軌跡としてソコルスキーが論文の射程に収めたことは適切だったと思う。

筆者は、ソコルスキー論文が田村（佐藤）俊子の移民小説、さらに社会主義小説を英語圏で紹介した功績に敬意を払うが、それらの小説に再評価をもたらしたとまでは思わない。但し、ソコルスキーが着眼した、北米・日本・中国で文化的差異を直視して立ち続けた女性の「ポジショナリティ」という問題意識は文学領域を超えて考察される価値がありそうである。そう感じていた矢先、筆者は「インターセクショナルリティ」（交差性）という概念を知った。これは人種・民族・ジェンダー・階級などによる分類が交差することで生み出されるさらなる抑圧の状況を意味するという。ホミ・バーバ以前にアメリカのブラック・フェミニズムで提唱された概念である。もしかしたら、田村（佐藤）の移民小説と突き合わせるべき概念は「インターセクショナルリティ」であったのかもしれない。

<参考文献>

- ジュリー・オオツカ『屋根裏の仏さま』（岩本正恵・小竹由美子訳）新潮社、2016年。
- 工藤美代子、スーザン・フィリップス『晚香坡の愛：田村俊子と鈴木悦』ドメス出版、1982年。
- 鈴木正和「佐藤俊子『侮蔑』を読む——異文化から見た日本への視座」『昭和文学研究』第29集、1994年。
- レオ・チン『ピカミング・ジャパニーズ：植民地台湾におけるアイデンティティのポリティクス』（菅野敦志訳）勁草書房、2017年。
- 戸坂潤『日本イデオロギー論』（初出1935年）岩波文庫、1999年。
- 長谷川啓編『作家の自伝87田村俊子』日本図書センター、1999年。
- ホミ・K・バーバ『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』（本橋哲也ほか訳）法政大学出版局、2005年。
- トリン・ミンハ『女性・ネイティブ・他者：ポストコロニアリズムとフェミニズム』（竹村和子訳）2011年。

Homi K. Bhabha, *The Location of Culture*, Routledge, 1994.

Kimberle Crenshaw, "Demarginalizing the

Intersection of Race and Sex," *The University of Chicago Legal Forum* 140, 1989 (Online).

John W. Dower, *Japan in War and Peace: Selected Essays*, New Press, 1993.

Susan Hayward, *French National Cinema*, Routledge, 1993.

Trinh T. Minh-ha, *Woman, Native, Other: Writing Postcoloniality and Feminism*, Indiana University Press, 1989.

Anne Sokolsky, "Not Just A New Woman Writer: The Political Awakenings in Tamura Toshiko's Fiction From 1936 To 1938," 2003.

*本研究は、山崎真紀子を研究代表者とする科研・基盤研究Bプロジェクト（19H04387）の成果の一部である。